

中野本町の住宅



都心の古くからある商店街裏手、さらに小学校とも近接した場所に位置し、まだ低層の古い木造家屋が密集した住民の息遣いを感じる路地に面する住宅の建て替えである。住み慣れた木造2階建住宅を解体し、1階を親世帯、2・3階は子世帯とした重層長屋とした。路地幅員を確保するため削られてより南北に細長くなった敷地では、採光確保と構造バランスが課題となった。そこで、1・2階は門型フレームを並べることで壁を最小限に抑えながらも壁量を確保した壁式RC造に、3階はS造として建物重量を抑え、杭なし直接基礎とすることができた。一番採光が確保できない2階中央部には吹き抜けを設け、3階屋根に設置したトップライトからの採光が空間の広がりや中心性をもたせるようにした。親世帯の1階は、今後も濃厚な近隣関係を維持できるよう各部屋がそれぞれ路地に面するようになっており、開口を大きく確保している。子世帯は、南側外階段から上がり、路地に開いたテラスアクセス型メゾネットとした。階段を介して路地を2階テラスまで引き込み、家に入らずとも屋根のある玄関先で気軽に井戸端会議ができるようにしたのである。前面道路は子どもたちがたくさん通る通学路でもあり、お祭り時は神輿が通過する重要な生活道路となっており、駐車場や2階テラスはすでにセミパブリックスペースとなっている。近隣の小さな個人店舗が閉店・解体され、閉鎖的な中高層マンションに建て替わって近隣関係を建築で遮断してしまう現状に、まだ路地らしさが残る住宅の可能性を追求すべきだと考えている。